



親子で伝統芸能に挑戦



「東区さわやか健康まつり」で区制30周年記念特別演舞に出演した斉藤さん親子

表紙の人は、丘珠獅子舞保存会に親子で参加している斉藤恵一さん(31)と恵也くん(7)です。

恵一さんが知人に勧められて獅子舞を演じ始めたのは五年前。以来、丘珠神社で年一回行われる奉納舞のほか、東区の行事などで年に二、三回、獅子の胴に入って、演舞を披露しています。

丘珠獅子舞は富山県から丘珠へ開拓にやってきた人たちを中心として一八九二(明治二十五)年ころに始められ、地域の方々によって受け継がれています。一九七四

(昭和四十九)年には、札幌市の無形文化財に指定されました。獅子舞は総勢三十人以上で演じられます。その勇壮な舞に、恵一さんは「子どものころから

あこがれていました」と話します。去年から獅子舞を始めたという恵也くんも、お父さんと同じように獅子舞が大好き。一人でビデオを見ながら練習をするほどの熱心さです。獅子舞では獅子取りと呼ばれる子どもたちが、十二種類の舞を演じます。恵也くんは「扇の舞」「剣の舞」など、まだ習っていないものも家でひそかに練習してレパートリーを増やしているそうです。

「大きくなったら獅子頭を持ちたい」と言う恵也くんは、うれしそうに恵一さん。獅子舞の最後には、獅子取りの子どもが大人に肩車されて獅子の角を弓矢で狙いながら退出する「獅子乗り」を演じます。その役を親子でやれるようになったことが、今までで一番うれしかったことですね」と恵一さんは話します。七月十四日にモエレ沼公園で行われた「東区さわやか健康まつり」でも、父親に肩車されて弓に矢をつがえる恵也くんの姿が見られました。

今年も九月十五日(祝)に、丘珠神社で奉納舞が行われます。東区が誇る伝統芸能を皆さんも一度ご覧になってみてはいかがでしょうか。

ひくしがすとりー

飛行場を米軍が接収する

終戦直後、連合国軍が札幌入りし、市内の主な建物や土地を接収します。札幌飛行場も接収され、米軍が空挺部隊の演習場として使いました。飛行場に残っていた旧陸軍の戦闘機や爆撃機はガソリンをかけて燃やされました。

一九五二(昭和二十七年)年に接収が解除されたため、飛行場用地の所管について政府と北海道庁が協議。その結果、警察予備隊(自衛隊の前身)が飛行場として使用する分を除き、約百八十畝を道庁が所管することになりました。さらに道庁は農家などへ用地を売り渡す際の方針を札幌村に提示。札幌村は道庁の指示に基づき、売り渡し計画を立てます。慎重な審議を経て、翌年、以前の農家や土地を提供した人たちなど約二百十人に用地を配分しました。

航空事業の開始と飛行場整備

接収が解除された年、青木航空が遊覧飛行を実施。これが札幌飛行場での民間航空事業の始まりです。一九五四(昭和二十九)年に

第18回

空と大地
札幌飛行場(三)

は陸上自衛隊北部方面航空隊が配備され、管制塔などの整備が始まります。その二年後、北日本航空が丘珠と女満別の間で運行を開始。以後、民間航空路線は順調に増え、稚内、函館、釧路、紋別、中標津との間に航路ができました。

一九五八(昭和三十三年)、政府が定める空港整備計画の指定を受けることを目指して、丘珠飛行場整備促進期成会が結成されました。その一方、一九六六(昭和四十一年)年には地域住民が丘珠飛行場移転促進期成会をつくり、関係機関に移転を陳情しています。

以後も飛行場をめぐる議論が続きました。札幌市は飛行場と調和したまちづくりを進めるため一九九八(平成十)年度に丘珠空港周辺のまちづくり構想を策定。この構想は、策定前年度に設置された、地域住民、学識経験者などからなる懇談会の提言に基づいてまとめられた指針です。空港周辺のまちづくりはこの構想によって進んでいます。



昨年30万人以上が丘珠空港発着の路線を利用しました